



「あまおう」11月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

9月下旬までは、降雨不足等によりやや緩慢な生育でしたが、その後の降雨・高温で持ち直しており、10月下旬の生育状況（頂果）は、3型で着果～小指、5型で出蕾～着果、普通ポットで出蕾始めとなっています。

2番果房は、早期作型では昨年並みの内葉数6～8枚で分化、普通ポットでは内葉数4～6枚で分化と思われますが、寒冷紗被覆やかん水の状況によりほ場間のバラつきが見られます。

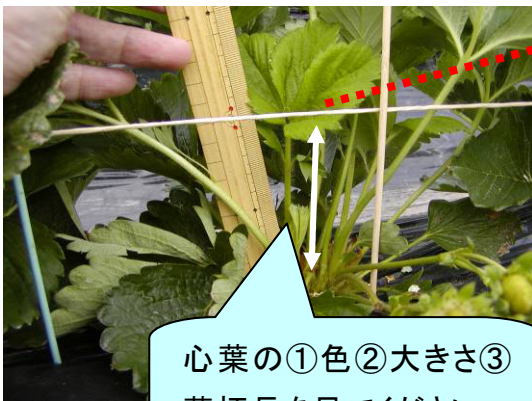
10月に数個の台風接近があり、ビニルの被覆が遅れています。被覆後は灰色かび病の発生が懸念されますので、定期的に予防防除を行いましょ。また、スリップスの発生が多く、ハスモンヨトウも引き続き確認されていますので、併せて、防除の徹底をお願いします。

11月は厳寒期に向けた株作りの時期になりますので、理想の草勢になるよう早めの管理をお願いします。

今後の管理

草勢管理について

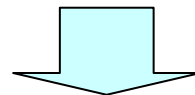
11月は1番果房の着果負担がかかるため、“成り疲れ”させないよう草勢を維持（心葉展開時の葉柄長により判断）することが重要になってきます。



心葉の①色②大きさ③葉柄長を見てください

【心葉展開時の葉柄長等による草勢判断】

草勢	弱い	適切	強い
心葉の葉柄長	8cm以下	10～12cm	13cm以上
心葉の色	濃緑色	緑色	黄緑色



電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く
------	-------	------	-------

電照は、11月10～15日から2時間で開始し、その後は、心葉展開時の葉柄長を目安に時間を調節する。ただし、頂果が着色期の場合は11月10日から開始する。

※電照効果は1週間～10日後に現れるので、着果負担など生育を予想して時間を調整する。

※11月下旬から12月上旬にかけては、3番果房の花芽分化期と考えられるため、生育旺盛になりすぎないように注意する(3番果房の花芽分化が遅れる可能性があるため、心葉展開時の葉柄長は最大でも15cm程度にする)。

温度管理

着果状況に応じて、温度管理を変える。株が小さく、生育が遅れている場合は、高めの温度管理を行い生育を促進する。収穫中は低めの管理とし、果実肥大を促し品質向上を図る。

外気の夜温が10℃を下回るようになったら、ハウスを閉め込む。(通常11月中旬)

【 1番果房の生育状況別温度管理の目安 】

頂果の状況	昼間	夜間
～着果期	26～28℃	10℃
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃

摘果

摘果は、2番果房の出蕾を確認して、作型・生育状況に応じて行う。

1～2番の果房間葉数が2枚程度の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を行い、2番果房合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。

着果数が多い場合、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。

【 1番果房の摘果後の着果数の目安 】

2番果房の出蕾時期	1番果房の収穫前	1番果房の収穫期間中	1番果房の収穫終了後
1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

かん水・液肥

「かん水」や「液肥」は、草勢が低下しないよう定期的に行う。

かん水の目安として、pFメーターを設置しているほ場では、pF値1.7～1.8で管理する。液肥は、窒素成分で月に1～2kg/10aを、2～3回に分けて行う。

(液肥開始の目安 早期:収穫始め、普通期:頂果親指大以降<11月下旬以降>)

玉出し・わき芽除去

頂果の着色が開始する前までに、軽く玉出しや葉よけを行う。無理な玉出しを行うと果梗を折る原因となり、食味が極端に悪くなるため注意する。

玉出し作業と同時に、わき芽やランナーを除去する。

発根促進

イチゴの根は、収穫開始とともに弱っていき(白根が少なくなる)、“成り疲れ”の原因となる。発根促進剤(チャンス液、パフォームソイルなど)を活用し、できるだけ多く発根を促す。

病虫害について

○ うどんこ病、灰色かび病

一度発病すると防除が困難であるため、イチゴ薬剤散布例(平成25年度版)を参考に、定期的に農薬の予防防除を行う。

○ ヨトウムシ、オオタバコガ

防除が遅れたほ場で、被害がみられる。年内は、定期的に防除を行うようにする。

○ スリップス

年内に飛び込んできたスリップスを防除し、ハウス内で越冬させないことが重要である。昨年度の発生消長調査結果及びイチゴ薬剤散布例(平成25年度版)を参考にし、定期的に防除を行う。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!